

中高生を対象とした「保育体験プログラム」の実施



この事例のポイント

- ・ 学内で実施している「子育てひろば」に中高生が参加できる「保育体験プログラム」を取り入れました。
- ・ 体験のみではなく、体験後に丁寧な振り返りを学生、中高生、教員で行います。
- ・ 子ども、保護者、学生、中高生が同じ場で関わることで、多世代の学び合いが生まれます。

この取組を行った背景や目的

コロナ禍の影響で中高生の保育体験の場が減ってしまったことから、地域に開かれた大学の子育て支援の場を活用できないかと考えました。本学学生が参画する機会として運営してきた「子育てひろば」に中高生も参加することで、世代間交流を通じた保育の魅力を体感できるプログラムに発展していくを目的とします。

実施した内容① 「保育体験プログラム」の実施

対象：中高生、学生、親子が参加。スタッフとして教員、ひろばの保育力支援員が参加。

方法：学内の「子育てひろば」（毎週木曜日及び、月1・2回土または日曜日）開催日のうち、春～夏期間の10:00～12:00にて実施しました。学生はボランティアとして継続的に携わっています。また、親子のほとんどが普段からこの「子育てひろば」に参加されています。中高生は個別フォームで事前に申込を行い、こちらから体験までにメールやLINEで連絡事項のお知らせをしています。

内容：「保育体験プログラム」に参加する中高生は、当日、担当教員とオリエンテーションを行います。そこでは中高生にその日の目標（1～2個）とそれを達成するための具体的な関わり方を考え、ワークシートに記入をしてもらいます。内容は、教員や参加者同士で共有します。そこでの思いを持って「子育てひろば」に参加します。



実施した内容② 体験後の振り返り

対象：中高生、学生、教員、保育力支援員

方法：その日の「子育てひろば」体験後に振り返りの会を実施します。

内容：学生と中高生で小グループを作り、合同で振り返りを行います。「子育てひろば」の片付けを一緒に行ったり、気づいたことや悩んだことについて振り返りの会で話し合ったりします。最後に中高生は、オリエンテーションで決めた目標を意識しながら感想や学びを発表します。中高生にとって、自身の経験を言語化する貴重な機会となっています。



実践するためのヒント

○成功や継続するためのポイントや要因

・学生の主体性の尊重

教職員は、「子育てひろば」に参加する学生の“やってみたい”を尊重し、学生の企画・運営をサポートしています。授業で学んだ関わりや教材研究を意識的に実践する姿から、学生の成長が感じられます。また学生主体の「子育てひろば」だからこそ、「保育体験プログラム」の運営にも学生の意見を取り入れながらアップデートしています。

学生にとっては、学年の異なる学生同士や、「保育体験プログラム」に参加している中高生など、多様な人々との関わりをもつことによって、単に自分が「子どもに関わること」に専念することでは得られない、多様な価値と出会う場になっています。このような経験を通して「子どもに育てられている」という実感を得ているようです。

・「振り返り」の場を設ける

中高生は、学生から今日の「子育てひろば」のねらいや、意識したことを直接見聞きすることで、保育を学ぶということを具体的にイメージするようになります。また、保育体験中にさりげないサポートを受けたり、合同で振り返りを行うことを通して保育の魅力を学生の姿を通して感じているようです。

・参加する保護者を「協働する存在」として位置づける

保護者へは教職員から受付時に中高生が参加していることを案内しています。地域の中で保護者と中高生が関わる機会ほとんどないそうです。そのため「自分との関わりが彼らにとって価値となれば」と温かく見守ってくださいます。このような意識の変化は、通常の「子育てひろば」では起こりにくいのではないのでしょうか。学生だけでなく保育を学ぶ前の中高生がいるからこそその相互的な成長の機会となっていることが考えられます。

○実施体制：取組にかかった組織、費用

地域連携推進センター委員会、子育て支援プログラムワーキンググループ、入試広報委員会など複数の組織が協働で実施します。事務的な業務（保険、連絡、受付など）は事務職員が担当します。費用は、中高生からの費用徴収はゼロ。大学側はスタッフの人件費、保険料などを負担します。

○今後の取組の方向性

- ・地域の子育て家庭、学生、中高生、高齢者などが関わり合い、共に成長できる場として継続・発展させたいと考えています。
- ・「こどもまんなか」社会の理念を広げる拠点として、地域に開かれた学びの場として、さらなる充実したプログラムを実施したいと考えています。